

# 隱岐の後鳥羽院と『百人一首』の秘密\*

林 直道\*\*

1. 後鳥羽院による定家抜擢
2. 亀裂
3. 鎌倉将軍源実朝との交流
4. 破局
5. 承久の乱後の定家の栄達
6. 隱岐の後鳥羽院と定家
7. 『定家家隆両卿撰歌合』の意義
8. 関係修復のきざし
9. 『百人一首』の秘密
10. いかにして後鳥羽院に伝えたか

## 1. 後鳥羽院による定家抜擢

第82代、後鳥羽天皇は建久9(1198)年、18才にして上皇となり、膨大な莊園領有による豊かな財力を背景に奔放な文化活動を開始した。20年間に31回におよぶ熊野詣での遂行、絢爛華麗な水無瀬離宮の造営など。とりわけ上皇が最大の力を注いだのは、建元元年(1201年)の「1500番歌合」の開催、「和歌所」の創設、新古今和歌集の編纂開始などに代表される歌の道の振興であった。それは王朝支配体制を脅かす存在となった鎌倉武家政権への対抗・文化攻勢の意味をもつものでもあったと思われる。

この後鳥羽歌壇の形成・発展において力を発揮したのが、のちの百人一首の撰者・藤原定家であった。定家の家(御子左家)は父の俊成の代において千載和歌集の撰者として、また幽玄体の歌風をもって歌の世界での名声が高まるのと反比例的に、家格が低下し、危うく公卿の地位を喪失しかねないほどの凋落ぶりであった(太政大臣・左右大臣を公、大中納言・参議・三位以上の高官を卿という。俊成は正三位非参議であった)。だが、定家のたぐいまれな歌の才能と革新性に注目した後鳥羽上皇は、特別のはからいをもって定家に「内の昇殿」を許し、かれを歌所の寄人に抜擢したのであった(1201年7月)。

この破格の取立てに感奮した定家は、生来の勤勉によりをかけて熱心に励み、上皇の期待にこたえた。かれは新古今和歌集の撰集に中心的役割を果たすとともに、たびたびの歌合や歌の講師など上皇の呼出しにも忠実に応じ、その過程で自らの歌才を一段と磨いたの

であった。

だが、やがて歌の選択、評価をめぐる意見の対立がもととなって、上皇と定家の間には亀裂が生じた。

## 2. 亀裂

定家と上皇との関係は、楽聖ワグナーと音楽をこよなく愛したバイエルン王ルートヴィヒ2世との関係に似ている。だが、そこには1つの大きな違いがあった。ルートヴィヒ2世がその地位を失うまでずっとワグナーのパトロンであり続けたのに対して、後鳥羽上皇は自身もたぐいまれな歌人の素質をもったがゆえに、自らの歌才の上達につれて定家に対するライバルに成長・転化したことであった。

上皇は定家の呈上した新古今の撰歌に納得せず、<sup>きりつぎ</sup>切継、やり直しを命じ、その余りの執拗さに定家は疲れ果て、ついには露骨に不快感をあらわすようになり、元久2(1205)年、新古今和歌集の一応の完成を祝う儀式(<sup>きょうえん</sup>竟宴)にも病と称して欠席するにいたった。この定家の不遜な態度が上皇を刺激し、長らく定家の身分昇進を停止させる原因となったと推察されている。定家はその日記『明月記』の中で、同じ身分の者ごとに集められて列席する新年の儀式において、自分よりもはるかに年若い者ばかりから成る「少将」の列の中にただ一人高年齢の自分が並ぶことの耐え難い屈辱について恨みごとを述べている。

## 3. 鎌倉幕府将軍源実朝との交流

上皇の定家に対する処遇の急激な降下と対照的に、定家の前に新たなパトロン出現の期待を抱かせたのは、鎌倉三代将軍源実朝であった。父頼朝の死、義父北条時政による兄頼家の暗殺以後、日増しに強まる北条一門の圧力のもとで次第に孤立し、軍事政権を嫌忌して文の道、歌の道にのめり込みつつあった実朝は、定家に対して深い尊敬をあらわした。

定家は鎌倉将軍との交際の重大性・危険性について悟らぬはずはなく、その交流は控えめなものであった。とはいっても、自分を師と仰いでくれる鎌倉将軍の出現が嬉しくないはずはなかった。元久2(1205)年、まだ書写披露の許されぬ「新古今集」の草稿がひそかに実朝のもとに送られたが、送り主は定家ではないかと推定されている。また承元元(1209)年には、定家は実朝に乞われて『詠歌口伝』や『近代秀歌』を書いて贈り、歌法を教え、実朝の歌の<sup>がってん</sup>合点・批評を行った。またその懇望によって秘蔵の万葉集を贈呈したりしている。さらに建保元(1213)年には定家は、「何か愁訴したいことはあるか」と聞かれたのを幸い、自分の所領である伊勢の國小阿射賀御厨の荘園の地頭による年貢の収奪をやめさせてほしいと訴えた。さっそく実朝から伊勢の地頭・渋谷善左衛門<sup>のじょう</sup>尉<sup>のじょう</sup>に対して非法を改めるようにとの下知が出された。

だが、この定家の実朝接近は、後鳥羽上皇の不信感を決定づけた。上皇は、地頭による年貢収奪を何とかしてほしいという公卿たちの泣訴哀願を一身にうけ、鎌倉武家勢力に対

する憎悪をつのらせていた。百人一首に収められた後鳥羽院の「人もをし人も恨めし味気なく世を思ふゆえに物思ふ身は」(建暦2、1212年)はその心境を歌ったものである。実朝個人は「山はさけ海はあせなん世なりとも君にふたごころわれあらめやも」と上皇に対してひたすら忠誠・恭順の意を表していたとはいうものの、上皇はその実朝をも含めて鎌倉幕府を嫌悪したのであり、「奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせん」(承元2、1208年)の歌は機熟さば武力に訴えても鎌倉を打倒したいとの決意を示したものであった。

そんな上皇にとって、定家の鎌倉将軍とのひそかな交流はとうてい許すことのできぬ背信行為であった。

#### 4. 破 局

上皇と定家の対立は最勝四天王院の御障子絵用の歌の選定をめぐる表面化した。定家が「生田の森」の歌として自作の歌「秋とだに吹きあへぬ風に色かはる生田の森の露の下草」を呈示したのを上皇ははっきり拒否し、代わりに「白露のしばし袖にと思へども生田の森に秋風ぞ吹く」という慈円ちまのの歌を入れるように命令した。慈円の歌よりも自分の歌の方がはるかにすぐれていると自負していた定家はこの上皇の措置を、歌を見る目がないとあしざまに非難し、不満をふれまわった。

だが、そのことよりもいっそう深刻なのは、この最勝四天王院というものの自体がそもそも鎌倉幕府調伏ちようふくの目的のもとに造営されたものだという点にあった。そのことを知らされないで歌の選定役に任ぜられた定家は、久方ぶりの栄誉な仕事とうけとり、嬉々として歌の選定に勉励した。しかし、この四天王院がじつは将軍を呪い殺すための施設であることを知った時、定家の驚駭と混乱はいかばかりであったろうか。定家は上皇に対する裏切りをまことにえげつない形で報復されたのであった。

決定的な破局は承久2(1220)年2月13日、内裏歌会の席で訪れた。この日、亡母の28年目の祥月命日しょうつきに当たるので出席を免除願いたいという定家の申し出を後鳥羽院はにべもなく却下し、3度も使を出して督促し無理矢理定家を参内させた。この席で定家は「野外柳」という題の下に「道のべの野原の柳下もえぬあはれなげきのけぶりくらべや」と詠んだ。これに上皇が激怒したのである。どの点で上皇を激怒させたかについてはさまざまな解釈があるが(拙著『百人一首の秘密』青木書店、1981年、175頁参照)、上皇の激怒はおさまらず、定家はその場で「勅勘」をこうむり、以後、参内はまかりならぬ、自宅謹慎せよとの処罰をうけたのである。

そして、この直後に後鳥羽院の対鎌倉クーデターがおこり(承久の変)、院の軍勢2万5000人は怒濤のように攻め寄せる19万5000人の鎌倉軍の前に無残な敗北を喫した。後鳥羽院は捕われていわばA級戦犯として隠岐へ、順徳院も佐渡へ島流しの身となったのである(島流しには罪の程度により近離こんる、中離おんる、遠離の別があり、遠離は隠岐・佐渡・土佐など

であった)。

## 5. 承久の乱後の定家の栄達

自分に処罰を課した帝王が失脚するという異例の状況下におかれた定家の立場は奇妙なものであった。上皇からその罪さしゆるすという下命が来ない限り、自分は受刑者の立場にあるという意識は消えない。けれどもそんな定家の困惑とかかわりなしに、政情は劇的に変化し、いやおうなく定家は新たな生活に巻きこまれていった。

幕府は後鳥羽直系の順徳院の皇子(後世、仲恭天皇と贈り名された)を廃位し、代わりに後鳥羽院の兄で政権から疎外されていた後高倉院の子(後堀河天皇)を皇位につけた。この後堀河天皇から定家は破格の厚遇をうけることとなった。また西園寺公経は院の反幕クーデターに反対したことで幕府から重用され、関東<sup>もうしつぎ</sup>・太政大臣などの要職について権勢をふるったが、その公経の姉を定家が後添に迎えたこともあって、定家は公経という新たなパトロンを得てにわかに羽振りが良くなった。定家はしばしば公経に随行し、また北山にあった西園寺邸での歌会に出席した。定家は権中納言に出世し、経済的にも豊かになり、土地を買い、家を広げた。定家の息子、為家は蔵人頭から最後には権大納言という高位にのぼった。3人の孫はそれぞれ二条(為氏)、京極(為教)、冷泉(為相)家という歌の宗家をおこし、わが国歌道界に確乎とした支配権を確立した。貞永元(1232)年、定家は後堀河天皇から新たな勅撰和歌集(「新勅撰和歌集」)の独力撰集を命じられるという栄誉を授かった。

## 6. 隠岐の後鳥羽院と定家

歌道宗家の家を守ることを専一と心がける定家は、この間、後鳥羽院とのかかわりを一切断ち、全く別の世界の人間として過ごした。上皇が隠岐へ流されてすでに十数年たつのに、その間、慰めの手紙一通、見舞いの品一つも送ろうとはしなかった。嘉禎2(1236)年、上皇は在京の歌人と連絡をとり、15人から歌各10首を召し、院の自詠を加えて80番の歌会に編み、上皇自らが判詞を書くデスクワークの「遠鳥御歌合」を催したが、もちろん定家はそれにも加わろうとはしなかった。

絶海の孤島で失意と寂寥、困苦欠乏のうちに身をおくほかなかった上皇とその周辺の人々がこうした定家の薄情、冷酷な態度に心の底から憤り、定家を無恥忘恩のやからと非難したのも無理からぬことであった。院の隠岐配流に随行した一人である清範が母重病を理由に一時都に帰ってきて定家に逢ったが、この清範から定家は「遠所<sup>ざんげん</sup>の讒言連々の由之を聞く」(隠岐では自分に対する非難中傷のことばがたえず続いていると聞かされた)と日記の中に書きとめている<sup>1)</sup>。

隠岐での後鳥羽院の作品、「時代不同歌合」の中で、院に忠誠をつくした藤原家隆が女流歌人の最高峰ともいうべき小野小町と合わされているのに対して、定家は二流三流の歌

人・元良親王と合わされており、歌人定家に対する院の評価が露骨に示されていて興味深い。

ともあれ、定家と後鳥羽院という平安鎌倉交期に出現した2人の傑出した歌人は、互いに背き合ったまま生を終えたと、考えられてきたのであった。

## 7. 『定家家隆両卿撰歌合』の意義

ところが、真実はそうではなかったのである。晩年の後鳥羽院に『定家家隆両卿撰歌合』と題する作品がある。これは左に定家を、右に家隆をおいて、それぞれの作品50首ずつを院が撰び、歌合に仕立てたデスクワークの歌合であるが、問題はそこにえられた定家の歌である。それらは1番から30番あたりまでは自然の景色の美しさとその無常な移ろいへの詠嘆といった歌が主流を占め、30番から50番までは、慕わしい人との別れを悲しみ、血の涙をしぼるといった歌が大半を占めている。そのうちのいくつかを抜粋してみよう(カッコ内の数字は歌合番号、すべて左歌)<sup>2)</sup>。

- (32) 倂おもかけはをしへし宿に先立ててこたへぬかぜの松に吹くこえ  
(あの人の面影を抱いてやってきたのに、教えられた家は見付からず、いくら名を呼んでも松風は答えてくれない)
- (33) よとともに吹上の濱の潮風になびく真砂のくだけてぞ思ふ  
(世々を経て海から吹き上げられてきて浜の潮風に地をはって飛ぶ真砂のように、心も千々に砕けてあの人を恋しく思っている)
- (36) 白玉のをだえの橋の名もつらしくくだけて落つる袖の泪に  
(白玉の緒が絶えるという緒絶の橋の名もつらく聞こえる。緒の絶えた玉のように砕けて袖を流れ落ちる涙にくれているこの身には)
- (38) 来ぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身も焦がれつつ  
(帰り来ぬあの人を待って、松帆の浦の夕凧のころに焼かれる藻塩のように恋しさに身も焦がれる思いでいます)
- (40) 心をばつらきものとて別れにしよはの倂なにしたふらむ  
(あの人を待つ心が耐え難くつらいことだと思って別れてからも、夜になるとあの人  
の面影が立ち現れてくる、私はまだ何を慕っているのでしょうか)
- (41) よもすがら月にうれへてねをぞなく命にむかふ物思ふとて  
(夜もすがら月にうれいを訴えて声を上げて泣いている。命にかかわるまでの恋の物  
思いをして)
- (43) せめて思ふいま一度の逢ふ事はわたらむ川や契りなるべき  
(せめてもう一度逢いたいと願う私は、あの人と三途さんずの川をともに渡るさだめなので  
あろうか)

- (45) やすらひに出でける方も白鳥のとば山松のねにのみぞなく  
(あの夜、ためらいながら私のもとを出ていったあの人の行方も知られず、私は白鳥のいる鳥羽山の松のように待ち続けて声に出して泣いてばかりいます)
- (48) 明くるよのゆふつけ鳥に立ち別れうらなみ遠く出づる舟人  
(夜明けを告げた木綿付け鳥(鶏)にも別れて、朝早く浦波を分けて遠くの海へと漕ぎ出てゆく舟人よ)
- (50) おもふ事むなしき夢の中空にたゆともたゆなつらき玉の緒  
(願っていたことは、虚しい夢として途中で終わってしまうにしても、いましばらく絶えないでおくれ、つらいことばかりだったこの玉の緒よ)

このように、別れた人のつらい運命を思って、くる夜もくる夜も泣きあかしている、といった趣旨の歌がずらりと並べられているのである。それはあたかも定家が、隠岐に幽閉された後鳥羽院に断ちがたい想いを寄せ、院との別れを嘆き悲しんでいるかのような情景となっている。つまり、この歌合は、定家よ、自分のことを想ってくれるそなたの真情は相わかった、という院のメッセージの意味をもつのである。

つい昨日まで、後鳥羽院とその周辺が定家を非難しその人間性に深い不信感を抱き続けていたのに比べて、まさに180度の転換といわねばならない。

では、一体なぜ、いかなる理由で、院はこのように定家に対する評価を一変させたのであろうか。

その理由は、まさに百人一首の出現、百人一首に秘められた内容が院を感動させたこと以外にはない、と私は思う。

## 8. 関係修復のきざし

じつは百人一首出現の少し前に隠岐の院と定家との間に関係修復の重要なきざしが現れていた。天福2年(1234)9月、定家は『古今集』から『新古今集』に至る八代の勅撰和歌集から各集10首ずつ合計80首を選出した『八代集秀逸』を撰集した。この定家撰『八代集秀逸』は80首中36首がのちの『百人一首』と一致し、他に『百人秀歌』のみに入っている「山桜咲き初めしより久方の雲居に見ゆる滝の白糸」(俊頼)をも含む点できわめて興味深い作品である。ところで、この『八代集秀逸』は後鳥羽院の皇子である仁和寺宮道助法親王の「仰せ」でつくられ、進献されたものであるが、校注者樋口芳麻呂教授の解題によれば、「じつは隠岐の後鳥羽院の企画で、道助法親王は父院の意を受けて定家に撰進させ、隠岐に送ったものであった」らしいのである。だから定家のものとは別に、院や家隆の撰した『八代集秀逸』もあり、また「伝本は少ないが、院・定家・藤原家隆の三者共撰の『八代集秀逸』も現存する」とのことである。

なぜ後鳥羽院は十数年の断絶ののちに、みずから定家にコンタクトをとったのであろう

か？恐らくそれは定家が独力で編纂を命じられた『新勅撰和歌集』とかかわりがあるのではないかと私は推察している。定家はこの勅撰集編纂の内意を受けたとき、ひじょうに思い惑ったことがかれの日記『明月記』にはっきりと書きとめられている。問題は要するに後鳥羽院・順徳院の歌をどう扱えばよいか、ということであった。もしも入れるとすれば、歌の名手であるから院の歌が全篇にみちあふれ、鎌倉幕府や親幕派＝体制派の実力者からとがめをうけることになるであろう。かといって数をへらせば、世間すなわち公卿仲間から体制派にコビを売るものとの非難をうけるであろう、と。

こうしたジレンマに悩み、迷いぬいたすえに定家はやはり両院の秀歌を約70首も撰入して提出したのである。この点にかれの芸術家的良心と抵抗精神を見ることができよう。

ただし定家はそのさい、ぬかりなく幕府系の歌人の歌も多数撰入した。それは両院歌撰入とのバランスを考慮したものだったのかもしれない。

後堀河天皇の逝去によってこの新勅撰はしばらく棚上げとなっていたが、天福2年(1234)11月上旬、前関白藤原道家から呼び出しがあった。そして定家の完成草稿本から両院の歌を削るようにとの指示があった。定家は結局、この指示にしたがって、自宅にもち帰り、その夜、自らの手で両院歌を残らず削除して再提出する羽目となった。結果的には鎌倉武将の歌の多数撰入のみが目立つものとなり、世上、「宇治川集」(宇治川は「もののふ」の枕詞)との陰口をたたかれることとなった。

けれども、定家が後鳥羽タブーがまかり通っていた時代に、一たびは両院歌を多数撰入した草稿本をつくり提出した事実はきわめて重要である。

こうした情報を伝え聞いた隠岐の後鳥羽院が定家にある種の期待をもち、かれにコンタクトをとって見たというのが『八代集秀逸』依頼の真相であろう。思いもよらぬ院からの連絡に定家が感激したことは想像にかたくない。定家撰の『八代集秀逸』では新古今集からの抜すい歌10首中に西行と並んで後鳥羽院の歌が3首も撰入されている。このことが院に好感を抱かせたこともまた、まちがいないであろう。

そうしたいきさつのあった翌年、定家の「百人一首」が出現し、そこに秘められた定家の「心」に院が驚嘆し、感動を覚えることになるのである。

## 9. 『百人一首』の秘密

この後鳥羽院の『定家家隆両卿撰歌合』はその奥書に「此歌合者、於後鳥羽院御遠所隠岐嶋、御閉居之間定給」とあり、院によって隠岐配流中に作られたことは明らかであるが、もう少しその作成時期を絞り込めないだろうか。この問題については、幸いにも樋口芳麻呂氏の次のような的確な考究がある。

「[成立] 本歌合第一番の歌に、作者名が注記されており、左歌は「権中納言藤原朝臣定家」、右歌は「従二位藤原朝臣家隆」とある。この記載を信ずれば、家隆が従二位に昇進

した嘉禎元(1235)年9月以降の撰でなければならない。さらに本歌合の歌の詠作年時を調べると、嘉禎2年7月の遠鳥御歌合の歌を含んでいるから、当然それ以降の撰となる。したがって、本歌合の成立は嘉禎2年7月以降、後鳥羽院の崩ぜられた延応元(1239)年2月以前の4ヵ年間と考えられる」と<sup>3)</sup>。

つまりこの歌合は、嘉禎2(1236)年7月以降、院の崩御までの4年間のいずれかのときに編まれたものとされている。定家の百人一首が選定されたのはこの嘉禎2年の前年、文暦2(1235)年5月である(7月から嘉禎元年)。この百人一首の出現以外に院の定家再評価を促したような出来ごとは何も見当らない。樋口芳麻呂氏も「定家の百人一首選定が院に定家を見直させる機縁となって、この撰歌合が編まれたのかもしれない」と述べておられる<sup>4)</sup>。院は百人一首に込められた定家の「心」を読みとり、感動し、定家に対する態度を百八十度転換させたと考えられるのである。

では、百人一首のどこが院をしてかくまで大感激させたのだろうか。百人一首は一番天智天皇「秋の田の刈穂の庵の…」、二番持統天皇「春すぎて夏きにけらし白妙の…」に始まり、最後は百番順徳院「ももしきや古き軒端のしのぶにも…」で結ばれる、万葉、平安、鎌倉の三つの時代の歌人百人をえらび、一人から一首ずつ合計百首を集めた和歌集である。もし院の感動したと推測される点を強いて探せば、九十九番後鳥羽院の「人もをし人も恨めし味気なく…」、百番順徳院の「ももしきや古き軒端のしのぶにも…」という、いずれも鎌倉幕府の権力増大を憤る、いわば政治的恨み歌を撰入した点であろう。たしかに、この撰歌は院にとって胸のすくことであり、定家の勇氣果断をほめたい気持ちになったであろうと推察されるところである。

しかし、この二首撰入だけで、院が定家評を百八十度転換させるほど大感激したとみるのにはやや迫力不足の感が否めない。そのうえ、百人一首には、定家は、院の憎悪の的であった鎌倉右大臣=源実朝の「世の中はつねにもがもな渚こぐ海士の小舟の綱手かなしも」や承久の乱で幕府方を支持し、乱後その功績で内大臣、太政大臣となり権勢を誇っている入道前太政大臣=西園寺公経の「花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり」なども入れている。これは院にとっては不快きわまることであり、先の後鳥羽・順徳二首撰入の喜びを帳消しにするものであろう。

だから、百人一首には表向きの百首列記の背後に、何かとんでもない秘密の仕掛けが隠されていてそれに院が感動したと見るほかない。私はその秘密の仕掛けを次のように解説している<sup>5)</sup>。

- 1) わが国の和歌の歴史のなかでは、相並ぶ歌の双方に共通の歌詞を織り込み、2つの歌を結びつけるというお遊びがあった。万葉の相聞歌や、中世の贈答歌もそうであった。贈られた歌の中から歌詞をえらびとり、そのことばを詠みこんだ歌を作ってお返しをすることで、言葉によって兩人の心が結ばれるという言霊信仰に由来するものであろう。勅撰和歌集ではこの共通語による2首結合という技法をうけつぎ、



何百何千の歌が次々と言葉のチェーンでつながれていくというルールができています。そして百人一首は、この合わせ言葉による歌の結合を極限までおしすすめ左右の隣り歌だけでなく、上下の隣り歌にもおしひろげたものと考えられる。すなわち百人一首のこの百首を、タテ10首、ヨコ10首の枠内に、ある特別な仕方で配列すると、上下、左右の隣にくる歌同士が何らかの合わせ言葉を共有するような、そういう百首が選ばれている。この合わせ言葉（圧倒的多数は同一語、その他若干数の掛詞、語呂合わせ等から成る）のタテ糸・ヨコ糸によって百首が一つの隙間もなくピタリと結ばれ合い、織り合わされている。私はその構造を「歌織物」と名付けた。

- 2) この歌織物の4つの隅（いわば百人一首曼陀羅の四天王の位置）には4人の主要人物の歌が配置されている。右下（持国天）には定家、左下（増長天）には後鳥羽院、左上（広目天）には式子内親王、右上（多聞天）には順徳院である。
- 3) 定家の歌は「来ぬ人を松帆の浦の夕風に焼くや藻塩の身もこがれつつ」である。つまり、帰り来ぬ人を待ちわびてその恋しさ慕わしさに身も焦がれんばかりでいます、と訴えているわけである。では、誰に対して訴えているのか。定家の歌が四天王のうちの持国天の位置にあるとすれば、当然、訴える相手は他の四天王の3人ということになる。まず増長天の位置にある後鳥羽院と多聞天の位置にある順徳院。この2人は承久の変で幕府に囚えられ隠岐と佐渡に島流しとなり、「都へ帰り来ぬ」帝である。もう一人は広目天の位置におかれた式子内親王である。彼女は定家が「心からあくがれそめし花の香」の歌を寄せたとおぼしい、愛する女性である。彼女は百人一首のつくられた年よりも約十年も前に亡くなり、今は西方浄土に安らっている、二度とふたたび「この世に帰り来ぬ」人である。定家にとって大恩ある2人の悲劇の帝と、二度とこの世では逢えぬ愛する女性と、この3人の「来ぬ人」に対する身もこがれる想いをあらわすのが百人一首にこめた定家の「心」なのであった。
- 4) 歌織物の右側七列のスペースを中心に、合わせ言葉を絵にかえてゆくと、全体に美しい風景が浮かび出る<sup>6)</sup>。それは後鳥羽院が「わがふるさと」とよんで愛してやまなかつた水無瀬野の景色を描いたもので、合計53の地名、地形、地物の名前が実景とほぼ的確に対応する位置に織り込まれている。
- 5) 歌織物の右上の四半分のスペースには『本朝世紀』に記述されている菅原道真をまつる「しだら神みこし」（幣ふり手たたきうたいおどるみこし）をかついだ律令制復活反対の農民デモの光景、左上四半分のスペースには『宇治拾遺物語』の「水無瀬殿・むささびの事」に書かれている怪物＝むささびを、かげかたという武者が矢で射ちおとす物語、下半分のスペースには『信貴山縁起絵巻』の第一巻飛倉の物語が——というように水無瀬を舞台とした3つの物語がたくみに織り込まれている。

以上の百人一首の秘められた内容がすべて院に理解されたとはいえないにしても、その

内の何パーセントかは(多分1、2、3は)きっと院に分かったに違いないと思う。

## 10. いかにして後鳥羽院に伝えたか

では、一体定家はどのようにして百人一首の秘密を院に伝えたのであろうか。歌道宗家としての家の繁栄を何よりも重要と考える定家が自ら直接院に百人一首を送りその秘めた内容を説明する危険を冒したとはとても考えることはできない。伝えたのは恐らく兄弟子の藤原家隆であったと思う。この節操堅き人物、人を裏切ることのない家隆が、定家に代わって隠岐へ便りを出して百人一首の内容を院に伝える役を買って出たのではないかと想像される。

だが、それにしても、隠岐への船の出る美保の関には幕府の出先機関があり、隠岐の流人、殊に後鳥羽院への手紙や差入れ品には厳重な目を光らせていたと思われる。もういちどクーデターをおこしたり、隠岐から本土への脱出を企てたりするのを防ぐために、事前の文書検閲はとくに念入りに行われたに違いない。だから家隆がストレートに百人一首の秘密について説明する手紙でも書こうものなら忽ち検閲にひっかかり、家隆のみならず定家もまた六波羅探題へ呼び出され、幕府に対する面従腹背が追及され、場合によってはその地位を剥奪される恐れなしとしない。

にもかかわらず、百人一首の内容が院の所に知らされたこと自体はまず間違いない。だからこそ感動した院は『定家家隆両卿撰歌合』を作ったのである。

では、どうやって家隆は院に百人一首の秘密を伝えたか。

- 1) まず百人一首を一番天智天皇から順次百番まで書き連ねる書き方ではなくて、歌織物の配列にしたがって、横に十段にきり、この順序で各段の10首ずつを清書する。下から順番に各段ごとの番号をつけておく。
- 2) そして「定家卿の撰にかかる古来の名歌、10首歌、10組でございます。この撰歌は、順を違えずに順次上に積み重ねて御覧<sup>らう</sup>じあれば、興またひとしおと存ぜられます」との手紙を添える。

たったこれだけである。これならば幕府の検閲係もとがめることなくパスさせたと思われる。ところで、受け取った院の方ではこの10首歌群の各々がすべて合わせ言葉の鎖で横に繋がっていることを瞬時に見抜く。こういう趣向で言葉のつながるように歌を配列することは勅撰和歌集の歌の配列で用いられ、定家が殊のほか得意とした手法であって<sup>7)</sup>、院自身もそういう修練を積んでいる。では、家隆の手紙に「順を違えずに順次上に積み重ねる」とあるのは何のことか。「もしかして、上下にも言葉がつながるようになっているのではないか」と院は感付く。そして、十段に積み重ねてみて、同じ順番の歌どうしがみごとに上下につながることを知る。「すごい。この10首歌10セット、合計百首は、左右にも上下

にも言葉がつながる歌織物になっているのだ。さすがは定家、見事だ」とつぶやく。

そして、四隅の4首に目をやり、右下の定家が左下の後鳥羽院、左上の式子内親王、右上の順徳院の3人の「来ぬ人」を待って身も焦がれる思いでいますと訴えかける構図を見抜くのにさほど時間はかからなかったと思われる。

ただし、さしもの院も、この歌織物の右側七列分の景色の歌の領域に水無瀬の美しい絵が浮き出ることまで見抜いたかどうかは確かめるべきがない。しかし、容易に到達された上記の範囲内だけでも百人一首の秘密の最低限の内容は院に確かに伝わったとみなすことができるであろう。

こうして院は衝撃的感銘をうけ、定家を再評価し、「その方の誠意、相分かったぞ」とのメッセージ代わりに『定家家隆両卿撰歌合』を編んだのであった。これ以後、院はすこぶる満ち足りた気分で余生を過ごされたのではなかろうか。

嘉禎3(1237)年、忠実だった家隆が死去し、その2年後、延応元(1239)年後鳥羽院崩じ、そのまた2年後仁治2(1241)年定家もあとを追った。

## 注

\* 本稿は、2003年2月4日に開催された第17回北東アジア研究会での報告「日本の平安文化の構図——北東アジア地域関係の中の日本——」をもとに、大幅に加筆・修正したものである。報告および論文執筆の機会を頂いたことに感謝したい。

\*\* 大阪市立大学名誉教授、経済学博士。専門は経済理論、経済変動論。

H. P. は <http://www8.plala.or.jp/naomichi/>

- 1) 定家『明月記』嘉祿2年3月28日の項(今川文雄訳 河出書房新社 第4巻、1978年、176頁)。
- 2) 歌の現代語訳は、大阪市立大学名誉教授・国文学者、増田繁夫氏に依頼して作成して頂いた訳文章稿に主としてとづいている。久保田淳氏『訳注藤原定家全歌集』上下(河出書房新社、1985-86年)をも参照した。最終責任はもちろん筆者(林)にある。
- 3) 樋口芳麻呂「定家家隆両卿撰歌合」(『群書類従解題篇』42-43頁)。
- 4) 樋口芳麻呂「定家家隆両卿撰歌合」(『和歌大辞典』明治書院、1986年、703頁)。
- 5) 拙著『百人一首の秘密』青木書店、1981年；同『百人一首の世界』青木書店、1986年参照。
- 6) 拙稿「隠されたラヴレター小倉百人一首」(『芸術新潮』1987年3月号)；大阪府島本町役場『島本町町勢要覧』平成9(1997)年参照。
- 7) 拙稿「勅撰和歌集四季歌の言葉連鎖——百人一首歌織物の原型」(『国文学 鑑賞と解釈』1983年新年号所載)；同「藤原定家の遊びの文芸(1)——拾遺愚草員外雑歌から百人一首へ」(東大出版『UP』119号、1982年9月号)。

(Naomichi HAYASHI)